

ながれやま 博物館だより

第6号（令和6年12月／年2回発行）

お知らせ

● これからの講座

詳細は広報ながれやま、博物館ホームページ等でご確認のうえ、お申込みください。

寺子屋講座

12/7	くずし字入門
1/18	考古学入門—貝塚について考えてみよう—
2/15・22・3/1	古文書を読む(古文書講座)

子ども教室

12/15	昔の印刷機で年賀状を作ろう！
12/15	茶道教室
3 / 2	煎茶教室

● 次号の「ながれやま博物館だより」の発行について

この「ながれやま博物館だより」は、次の第7号から6月と12月の発行になります。

展示案内

● 小展示「昔の道具～100年前にタイム・トリップ～」

★会期：12月7日（土）～令和7年3月16日（日）

電気やガスや水道が当たり前ではなかった「ちょっと昔」を、残された道具から振り返ります。

「衣」「食」「住」と「火」に関する道具を合計80点ほど展示するほか、昔から今へと道具の変化がわかる「道具年表」を実際の資料で再現します。（上條静香）



会期中休館日 月曜日（1月13日、2月24日は開館）、1月14日（火）・31日（金）、2月25日（火）・28日（金）、年末年始（12月28日～1月4日）

会場 第二展示室 **観覧料** 無料

※団体見学をご希望の場合は事前にご一報ください。

● 野々下元木戸遺跡の調査成果

令和6年2月から7月まで、野々下4丁目にある野々下元木戸遺跡の発掘調査を行いました。宅地造成に伴うもので、約2,100㎡の範囲を対象に(株)ノガミが実施しました。

野々下地区周辺は、長崎小学校の東側から豊四季駅方向にかけて、江戸幕府によって設置された小金牧が広がっていた地域です。今回の調査では、牧で放牧していた馬が集落内に侵入しないように築かれた野馬土手の一部が長さ60mにわたり発掘されました。

調査の結果、東西に平行した2条の野馬土手と、そのあいだに掘られた深さ2mの堀（野馬堀）が見つかりました。土手は2mの高さがあったので、高低差は4mにも及びます。土の層を観察すると、野馬土手は野馬堀を掘った土を幾重にも盛土し作られていることがわかりました。

また、土手を積み直した跡や堀に溜まった土砂を掻き出した跡なども見つかり、村人による土手の管理やメンテナンスの様子も明らかになりました。

また、野馬堀に壊された形で、シシ落としと呼ばれる落とし穴（直径2m・深さ2.5m）が野馬堀に沿って14基見つかりました。これは、野馬土手が作られる前にはシシ落としがイノシシや野犬などの害獣から集落を守るために用いられていたことを示す、貴重な発見です。

野馬土手の調査後には、土手の下から約5,000年前の縄文時代中頃の集落跡が発見されました。一部の住居跡は野馬堀によって壊されていますが、竪穴住居跡12軒や貯蔵用の土坑40基などが見つかり、土器や石器、石製の装身具などが多数出土しました。また、数軒の住居跡からは、地面を浅く掘った一般的な地床炉ではなく、深鉢形土器の下半分を割り取って、残りの上半分を床面に埋め込んで炉とした「土器囲炉」が見つかりました。ここで発掘された多くの



土器囲い炉

炉跡では、長期間にわたり火を焚き続けたことで、土器の内面や周囲の土が熱によって赤みを帯びたり、硬くなったりする変化が確認されています。電気やガスのない縄文時代には、炉は単なる調理用の火元だけではなく、明かり取り（照明）や暖房器具としての機能も備えていた重要な設備だったのでしょう。

（宮川博司）



野馬土手(上)と野馬堀(下)

● 発掘調査の成果を引き出す仕事 ― 整理作業の紹介③ 復元作業 ―

復元作業は、接合作業で組み上げた遺物の欠けている部分を復元材で埋め合わせ、壊れる前の姿に戻す作業です。この作業は、遺物の全体形状を明確にすること、復元材で強度を増すこと、安定して置けるようにすること、そして遺物の形状や技法を図に描く作業をやりやすくすることが目的です。

土器類の復元材には主に石膏が使われていましたが、劣化の早さなどの問題があることから、現在ではエポキシ樹脂を用いた復元材を使っています。曲面の多い部分は作業が難しいため、裏打ちを施したり、作業を2回に分けたりします。また、厚みが3~4mmしかない土師器にはより丁寧に作業するなど、土器に応じて対応を変えています。このとき、土器（本物）と復元材（修復部分）の違いがわかるように仕上げます。

復元材が固まったあとに表面を削って滑らかにしますが、このときに本物の土器まで削らないよう注意しなければなりません。ここでも細心の注意と熟練の技が求められます。（小川勝和）



資料・文化財紹介

● 新収蔵資料・電話料金箱

先日、流山地区の旧家から資料の寄贈を受けました。寄贈者の両親と祖父の2代にわたる流山での生活がわかる資料群で、そのなかには当館としては初の収蔵品となる資料もありました。今回はその一つ、電話料金箱をご紹介します。

これは、各家庭に電話が普及する前の時代には近所の電話のある家で借りることが一般的であったため、その都度料金を入れるために持ち主の家に置かれたものです。昭和34（1959）年の電話普及率（人口100人あたりの電話機数）は5%弱でした。携帯電話だけで170%超という現在に比べると、どれほど電話が少なかったかがうかがえます。寄贈者の家は当時としては珍しく、外壁がモルタル製の洋間を備える邸宅であったそうですから、数少ない電話があったこともうなずけます。

資料の外見に目を向けると、小さな木箱に、小銭を投入する開口部と、柱などに吊り下げするための穴が見受けられます。その形状や仕上がりから、市販品と判断されます。当時の市販品には金属製のもの、机の上に置く形のものなど様々な種類がありました。このことも、電話貸しが当たり前の光景であったことを物語ります。こうした比較的新しい市販品も、ある時代や社会を知る手がかりになるのです。

（伊藤智比古）



イベント報告

● 企画展「赤城山に受け継がれた流山の記憶—赤城神社と人々—」を開催しました

7月20日（土）から10月27日（日）まで開催された企画展では、展示のほか、展示解説会や講演会・講座などで計7,570人にのぼる皆様のご来場をいただきました。ここでは、展示内容のうち、赤城神社本殿を調査するなかで見つかった素晴らしい彫物をご紹介します。

それは、本殿と向背柱を繋ぐ2本の梁（海老虹梁）の、「波にうさぎ」の彫物です。透かし彫りによって横長に渦巻く波のように表現されている海老



海老虹梁

虹梁の外側両端に、真っ直ぐに跳んで追いかける形と飛び跳ねながら見返る形との2羽のうさ



飛び跳ねながら見返るうさぎ

ぎが大波の上で視線を合わせるように向かい合って配置されています。このうさぎの彫物は、躍動感に溢れる構図の中で、足の動きや筋肉、毛並みの表現など、非常に写実的な彫り方をされており、計4羽のうさぎはまるで生きているかのようです。龍・象・猿・鳳凰などといった他の動物が様式的な彫り方でどっしりと表現されているのとは対照的です。

本殿から見つかった棟札には、彫物棟梁として武蔵国榛沢郡中瀬村（現・埼玉県深谷市）の住人高松藤吉の名が記されていました。「波にうさぎ」といえば、日本神話に^{おおくにぬしのみこと}大国主命とともに登場する「^{いなぼ}因幡の白うさぎ」が思い浮かびます。赤城神社の御祭神である「^{おおなむちのみこと}大己貴命」が大国主命の別名であることから想起されたものと思われますが、神社側のリクエストなのか、はたまた彫師側のアイデアによるものなのか、現状では定かではありません。しかし、いずれにしてもこのような素晴らしい彫刻を彫り出した、アーティストのような彫物棟梁の腕前は見事なものです。

（小栗信一郎）

ながれやま博物館だより 第6号

発行日 令和6年12月1日

編集・発行 流山市立博物館

〒270-0176 流山市加一丁目1225-6

お問い合わせ ☎04-7159-3434

ホームページ <https://www.city.nagareyama.chiba.jp/life/1001780/1001785/index.html>



ホームページ



Facebook



X(旧 Twitter)



Instagram